

9

「宇治の橋姫」の変容
謡曲『江口』他

『古今和歌集』に詠まれ、『源氏物語』宇治十帖を通して「待つ女」、「悲恋」のイメージを負った「宇治の橋姫」。そのイメージが、後世どのような変容をとげたかを、さまざまなジャンルの作品から見てみましょう。

〔作品梗概〕 摂津国江口の里（現、大阪府東大阪市）に來た僧が、ここで西行法師の詠んだ「世の中を厭ふまでこそかたからめ飯の宿りを惜しむ君かな」という歌を思つて感慨にふけつてみると、ひとりの女があらわれ、その折の江口の君（遊女）の返歌を知つているかと思ひかけ、その「世を厭ふ人とし聞けば飯の宿に心留むなと思ふばかりぞ」のごとく、俗世に心を留めるな、と言ひ置き、自分は江口の君の霊だと述べて姿を消す（前場）。

江口の君はふたりの遊女とともに舟で姿を見せ、遊女の身の上のはかなさを嘆き、舟遊びのありさまを見せ、遊女と生まれた罪業の深さ、この世の無常を述べて舞を舞う。そして、執着を捨てれば迷いはないのだと説き、その身は普賢菩薩、舟は白象となつて、西方

浄土の空に消えていく（後場）。

* 掲出の場面は、後場、江口の君が遊女たちとともに現れ、舟の中で身の上のはかなさを嘆くところで、「宇治の橋姫」に言及されるのは、能の舞台では地謡が詠う江口の君の台詞。

① 謡曲『江口』（抄出）

ワキ「さては江口の君の幽霊仮にあらはれ、われに言葉を交しけるぞや。へいざ巾ひて浮べんと、

ツレへ（上歌）言ひもあへねば不思議やな、言ひもあへねば不思議やな、

月澄みわたる川水に、遊女の歌ふ舟遊び、月に見えたる不思議さよ、

月に見えたる不思議さよ。

後見こうけんが屋形船やがたぶねの作り物を脇正面に置く。

〔声〕の囃子はやしで、ツレ（主役の助演）の遊女、シテ（主役）の江口の君、

ツレの遊女（片袖を脱いだ姿）の順に登場して舟に乗る。艫かたに乗ったうしろ

のツレは棹さしを持つ。地謡（上歌）（下歌）が謡われる。

〔一声〕

【通釈】

後場 僧が御経を誦誦し始めると、月明かりのもと、遊女たちの船遊びの様子が見えてくる。

ワキ（旅僧）「さては江口の君の幽霊が仮にあらわれて、私に言葉を交わしたのだな。へでは巾ひをして成仏させよう」と、

ワキ（旅僧）／ワキツレ（従僧）…へ言ひも果てないうちに不思議なことだ、言ひも果てないうちに不思議なことだ。月の澄みわたる川の水に、遊女が歌っている舟遊びの舟が、月の光に照らされて見える、その不思議なことよ。月の光のもとに見える不思議なことよ。

地謡（江口）…川舟を繫留して、波を枕として一夜の契り、舟を留めて波の上での一夜の契り、波の上に浮かぶ夢のような享樂の世の暮らしに馴れ、この世が無明長夜の辛い世であることに気づかない我が身のはかなさよ。